

なぜ「五文型」なのか？

本書は、『関係詞の底力』に続く「底力シリーズ④」です。関係詞はいわば複数の文をつなぐ接着剤で、実用英語においてもその理解は欠かせないものですが、今回は英文そのものを構成するパターンである5つの文型、すなわち「五文型」に焦点を当てます。(なお、5つの文型の総称としての「五文型」とSVOCの「第5文型」との混同を避けるため、本書では前者を「五文型」と漢字で表すことにします)

皆さんの中には「五文型」と聞くと、いやな思い出が呼び起こされる方がいらっしゃるかもしれません——「五文型？ SVとか SVOとか SVOCとか、まるで受験英語じゃないか。文型なんて実用英語には何の関係もないのでは？」などと。それでは、次のジョークの意味はおわかりでしょうか。

A: My dog has no nose.

B: How does your dog smell?

A: Terrible!

最後の“Terrible!”でネイティブスピーカーは大爆笑！...のはずですが、いかがでしょうか？

これは、文型の違いによって動詞の意味が異なることをふまえたジョークなのです。動詞smellは文型によって異なる意味を持つのですが、このジョークは文型による動詞の意味の違いを知っていないと、その面白さが理解できません。(このジョークの意味については本文でふれます)

まさに「文型」がわからないとジョークもわからないのです。

単語を並べるだけでは...

英文法の重要性については、いまさら語るまでもないでしょう。実際、巷には一般・社会人向けに「中学・高校の英文法を一週間でやり直す...」といった類の本があふれていることから、英文法の必要性が認識されていることがおわかりだと思います。英語の母語話者でない人間にとっては文法の理解は欠かせません。幼児の片言レベルの内容ならともかく、単語を並べるだけではメールひとつ書けません。

「単語さえ並べればなんとかなる」というのは「数字だけ並べれば計算できる」というのと同じです。でも、そんなはずはありません。3×5と3+5では出てくる答えはまるで異なります。つまり、数字をかけるのか足すのかわからなければ計算のしようがありません。ただ数字を並べても答えは出ないのです。

単語が数字ならば、文法は数式をつくるルールであり、五文型はまさにその数式そのものです。語順を変えるだけで意味ががりと変わってしまうこともありうるのです。

このように考えると、五文型というのはなにも受験専用ではなく、それら5つの文型を正しく理解することこそが、まさに英語を実用の現場で用いる際にも必要になる、文法理解への第一歩といえるのです。また、五文型について深く知ることは英語という言語の根本的な面白さにふれることにもなります。

本書を手にするみなさんが五文型という観点から英語の理解を深めていただき、その運用力を伸ばすだけでなく、英語に対する知的好奇心をさらにかり立てていただけるならば、これに勝る喜びはありません。

2012年11月

佐藤 ヒロシ

本書の構成と使い方

本書は序章を含め、全7章から構成されています。

序章から第4章は「五文型」(第1文型から第5文型まで)のそれぞれの文型について詳しく述べていますが、従来の説明に甘んじることなく、今まで取り上げられなかった考え方や項目まで掘り下げ、解説しています。

さらに、第5章から最後の第7章までで、従来の五文型理論の問題点や改善すべき点を取り上げるという構成になっています。

五文型の仕組みそのものの理解が不十分であると思われる方は、序章から順に読み進むことにより徐々にレベルアップしていきながら進んでいます。

すでにひと通り五文型の仕組みを理解できていると思われる方は、自分に抜けていそうな項目から読み始めていただいてもかまいません。ただし、その場合、従来自分が学習したことのない視点からのアプローチも含まれていることがあり、その理解を前提とした項目に遭遇する場合があります。本書では関連する事項に随所に参照ページを示してありますので、それを活用することにより、さらに理解が深まるはずですよ。

各項の最後には、その項で扱った内容のポイントを「まとめ」として箇条書きにしてあります。

*

五文型から英文法の発展事項にふれてみたいという方には、拙著『実は知らない英文法の真相75』(真相シリーズ①)、および『関係詞の底力』などの「底力シリーズ」(ともにプレイス刊)がお勧めですよ。

さらに、日本人学習者が陥りやすい英文を読む際の誤解を正したり、英文の論理的な読み方を身につけたいという向学心の旺盛な方には、『実は知らない英文誤読の真相88』(真相シリーズ②)、『東大英語が教えてくれる英文正読の真相55』(同③)に挑戦していただきたいと思ひます。

本書で用いる最低限の文法用語

- **S** = 主語 (Subject) : 動詞が表す動作・状態の主体となるもの。主語になれる品詞は「名詞・代名詞」および、「名詞の働きをするもの」(名詞節・動名詞 (doing)・不定詞 (to do) など)
- **V** = 動詞 (Verb) : 「(～が・は) ... する・である」という意味 (動作・状態) を表すもの。目的語 (O) をとれるかとれないかで「他動詞」と「自動詞」(下記参照) に大別される
- **O** = 目的語 (Object) : 動詞が表す動作の対象となる名詞 (または名詞に相当する語句)、または前置詞の後ろに置かれる名詞
- **C** = 補語 (Complement) : 「名詞」の状態を説明するもの
※ SVCの文型ではS (主語) となる名詞、SVOCの文型ではO (目的語) となる名詞がどのようなものか/どうするかをそれぞれ説明する
- **M** = 修飾語 (句) (Modifier) : 文の要素 (S・V・O・C) にならず、名詞や形容詞、動詞を修飾するもの
- **A** = 付加詞 (Adjunct) : 従来は修飾語 (M) として扱われてきたものの、文の要素として欠かせない部分
- **自動詞** = 目的語 (O) をとらない動詞 : SVまたはSVCの文型を構成する
- **他動詞** = 目的語 (O) をとる動詞 : SVO、SVOO、SVOCの文型を構成する
- **節** = 接続詞・関係詞・疑問詞を先頭におき、「主語+動詞」をともなう構造。名詞節、形容詞節、副詞節がある：
 - **名詞節** : 文中で節全体が名詞の働き (主語・目的語・補語・前置詞の目的語・または名詞と同格) をするもの
 - **形容詞節** : 節全体が名詞を修飾するもの (what・-ever以外の関係代名詞・関係副詞が導く節のこと)
 - **副詞節** : 節全体が副詞の働きをするもの

(以上は本文中でも随時、解説されています)